

阿部 ^{きだよし}定珍

安永8年(1779)旧分水町渡部に生まれた阿部家七代目の庄屋で良寛の親交者。

名は半十郎、通称は、造酒右衛門、月華亭、養生館などと号した。和歌詩文を好み、村政にもすぐれた行跡を残す。

国学者の大村光枝が来遊し、数年も阿部家に逗留して万元和尚の「野路の枝」を写本し弥彦神社に残している。

定珍は良寛の物質的な援護者であり、良寛遺墨が最も多く阿部家に残されている。良寛が読み仮名をつけた「万葉集」の木版本があり有名である。法華宗の信者定珍は四国霊場参拝に、妻のわか、子の定緝と1838年に旅し高知窪川の旅先、60歳で没す。

幼名正吉、半十郎などと称した。文化元年(1804)造酒右衛門と改め、渡部村の庄屋職を継ぐ。

文化年間から天保年間(1804~43)にかけて、円上寺瀧周辺で瀧七ヶ村(本山・弁才天・京ヶ入・蛇塚・中曾根・下曾根・川崎)と円上寺村(以下寺泊町)との間で、境界争いや用排水出入(訴訟)などが長期間にわたって起きている。この時、瀧周辺に多くの小作地を持っていた阿部定珍は、瀧七ヶ村の代表の一人として江戸の奉行所まで上がっている。また定珍は、若い頃の江戸へ3年間遊学し、大村光枝から歌道の指導を受けたともいわれ、嵐窓・月華亭・養成館などの号を名乗っている。さらに庄屋職の傍ら、良寛と親しく交際し、唱和している作品を残している。その作品は「自筆和歌書状類」全七巻に収められ、国指定重要文化財に指定されている。

天保9年(1838)2月には、念願であった西国・四国巡礼の旅に妻子・奉公人合せ6人で出発した。その時の旅日記を「西国紀行」「四国紀行」と呼んでいる。「西国紀行」は2月23日の出発より、4月16日金毘羅御社のお参りまで記述されている。「四国紀行」は4月15日より、6月3日医師謙斎より風薬をもらおうという記述で終わっている。定珍は6月20日窪川(高知県)旅籠大阪屋金蔵方で四国巡礼の旅半ばにして世を去った。

土佐藩では火葬を禁じていたため、遺骸は岩本住職らの取り計らいによって「現光院即成了心居士」の戒名を附して、寺から七町ばかり北方の山麓へ葬られ、同行していた息子仁六郎(後の濤平)によって墓碑は建立された。同行の人々は、12月に遺髪や爪などを持ち帰った。その後、定珍七回忌にあたる天保15年、後をとった二男定経が墓碑を建て替えた。

安永8年(1779)生まれ。

天保9年(1838)6月24日没 60歳。